東京帝國大學經濟學會

經濟論叢

第五十一卷第一號

昭和十五年七月

論叢

民族主義と帝國主義……文學博士 高田保馬

實踐學としての日本經濟學……經濟學博士 谷口吉彥

時論

日本國と蘭領東印度……法學博士 末廣重雄

研究

江戸時代の國產奬勵……經濟學士 堀江保藏

理想型理論の方法的意識……經濟學士 出口勇藏

自由貿易主義の吟味……經濟學士 岡倉伯士

說苑

北支滿洲損害保險市場……經濟學士 佐波宣平

ハンセンの人口政策に就いて……經濟學士 青盛和雄

附錄

彙報

外國雜誌論題

理想型理論の方法的意識

出口勇藏

一　理想型の實相

吾々は前稿に於いて、比較的詳細にウェーバーの理想型の理論を彼みづからに據りつつ展開した*。理想型の論理的構造、その屬性、その種類、理想型的認識の特質、またかかる方法論に由る經驗科學の歴史と進歩――これらに關する形式的なる理解は今や充分であらう。吾々が更に進んで行ふべきことがらはこの理想型や理想型的認識を實質的に認識してそれらの實相を明かにし、かくしてかかる歸結を生ぜしめたウェーバーの方法的意識をつきとめることである。凡そ認識の眞理價値とは認識の形式的なる論理的操作の中にのみあるのではなくして、一層重要なることは、その認識と對象との一致あるひは不一致を見究めることによつて判定されるものである。分析論理の整合を求めて展開されてゐる理想型の理論の眞理價値は、ゆゑに、この形式的に整合なる概念構成によつて實在が如何に汲みとられ如何なる眞理內容を認識にもたらすかと云ふことを檢討することによつてでなければ判定されえないのである。しからばこの檢討はいかにして行はるべきであらうか。吾々は先づ第一に、この理論の實在との關はり合ひを知るために、或特殊の理想型を取り上げなければならぬ。第二に次のことが必要である。――吾々は先に經驗科學はすべて先驗的前提の上に立つことをウェーバーから學ぶところがあつた。ウェー

* 本誌前々號拙稿「理想型の理論」

バーが書いてゐるやうに、「あらゆる經驗的知識の客觀的妥當性は、與へられた現實が或獨特の意味で主觀的な、すなはち吾々の認識の前提を表示してゐるところの、而して經驗的知識のみが吾々に與へることのできる眞理の價値の前提に結ばつてゐるところの、範疇に從つて整序されると云ふ事實にまた此事實にのみ基いてゐる。」[1]ところでウェーバーに於いては、この先驗的前提によつて如何なる內容が經驗科學の中に豫め規定されて這入りこむかが明確にされてゐるとは云へない。或はむしろかかる規定そのものを存在論的に深く明かにすることを彼の認識論的立場がゆるさなかつたし、また彼の學問的潔癖はこのことを彼に禁じもした。彼の方法論を纏ふ陰翳は實にここより發すると云ふことができる。けれども吾々はウェーバーの方法的意識に潛入するために、彼が深く立入ることを欲しなかつたしまた立入ることをなしえなかつたこの先驗的前提そのものの中から認識の先驗的前提の實相をえぐり出さなくてはならない。蓋し方法的意識とはかかる前提をも自覺にもたらすところになければならぬからである。ゆゑに吾々の檢討は、以上の二つの理由からして、或特殊なる理想型の先驗的前提そのものの中に這入つてそれの實在的なる規定を見きはめ、それに基いて理想型の實相を認識することでなければならない。

吾々は經濟理論の理想型とされる抽象的なる純粹理論を取り上げよう。ウェーバーは之について——彼の他の表現と切り離して容易に暗記されそのために却つて樣々の安易なる把握を惹き起す表現であるが——次の樣に書いてゐる。

「それは交換經濟的社會組織、自由競爭、および嚴密に合理的なる行爲を條件として商品市場に於いて起る諸事象の理想像を見せてくれる。この思想像は歷史的生活の一定の關係と事象とを結合して思惟された諸聯關の、內に矛盾を含まない一つの世界

1) WL. SS. 212, 213 (邦譯「社會科學方法論」—岩波文庫版— p. 100)

をつくり上げる。內容上その構想は本來、實在の一定の要素の思想的高昇によつて獲られたところのウトピーの性格を帶びてゐる。[2]」更につづいて一層適切に、「それは歷史的に與へられた近代の交換經濟的社會組織の『理念』である」とも書かれてある。[3]

此理想型の先驗的前提はしからばいかなるものであつたであらうか。文化は歷史的に與へられてゐる。ウェーバーに於いてはそれは西洋近代の文化、經濟的には近代的交換經濟の組織、資本主義に他ならぬ。此文化の特色は「合理的精神」にある。「吾々の現代のヨーロッパ・アメリカの社會生活および經濟生活は特殊な樣式に於いてまた特殊な意味に於いて『合理化』されてゐる。[4]」ところで吾々は問ひ始める。かゝる特色ある文化が與へられてゐると云ふことは本來いかにしてであつたのであらうか。次のやうにして、とそれは答へられなければなるまい。資本主義社會は與へられるよりも以前に、近世の偉大なる思想家達によつて――吾々が第*三節のはじめに概說したやうに――實踐的に意慾された文化の形態であつた。社會をそれに則つて變革し社會の中に實現することを意圖された社會組織のイデーであつた。而してこのイデーはその一群の偉大なる思想家の洞察に從つて社會の內に實現された。現實に現れたの實在的な姿が彼等のイデーといかなる關はり合ひを持つてゐたか、また彼等のイデーはそもそも人類社會の理念としてどれだけ具體性を持つてゐたか、どこに重大なる見落しをしてゐたかを、今詳しく尋ねることはできない。けれども兎に角、社會は彼等のイデーの線に沿つて生成し、後人に對しては、そのイデーは既に與へられたものとしてそれの Gewordensein の姿に於いて生活の環境となつてゐるのである。――以上のことを「與へられてゐる」と云ふ表現は意味しなければならないであらう。それゆゑその文化が人々に認識することを迫る文化意義とは、實踐的イデーに媒介されて形成されたかかる文化の形態の實踐的歷史的意

2) WL. SS. 190, (同書 p.72)
3) WL. S. 190, 191 (同書 p.37)
4) WL. S. 487. ウエーバーの『經濟史』を讀む人は合理的精神に關する數多くの表現に出逢ふであらう。
* 拙稿「マックスウエーバと十九世紀の方法的意識本誌」(本年四月號)の第三節。

義、云はゞ觀念的—實在的 (ideal-real) な意義でなくてはならないであらう。而かもかかる意義は、實は現實に足を踏まへて實踐を志向する認識の主觀即ち歴史的實踐的なる認識の主觀に對してのみ、あらはになるべきものであらう。ところでウェーバーに於いては此文化意義はいかに把へられてゐたか。またそれをいかに把へるべく認識の主觀は規定されてゐたであらうか。

既に見たやうに、ウェーバーに於いては文化意義とは「價値理念への關係」であり實踐性を否定する Wertbeziehung であつただ。からそれはで ideal-real あることはできず、唯々 wertbezogen であるのみである。認識の立場即ち價値觀點 (Wertgesichtspunkt) も之によつて規定されてゐる。さて文化意義の認識に當つて對象と主觀とは分化すると云はれた。だから吾々はかく分化するこれらのものを見究めて更に深く認識の前提に踏み入らう。先づ主觀について云へば、吾々が既に前節に於いて人々の注意を促しておいたやうに、それは個人としての西洋の文化人——この者のもつ關心は Wertbezogenheit であると書かれてゐる[5]——に於いてのみ成り立ちうるやうな主觀である。而かもそれは、浚價値性理論の第一次的作用とわたくしが名づけた要請に基いて、世界觀からもまた實踐からも遊離したところの單なる認識關心の所有者でなければならなかつた。さてこの認識關心とはしからばいかなる內容を持つものであつたか。ウェーバーは云ふ、現代のヨーロッパ・アメリカが遂げ吾々が上に引照するところがあつた社會の「合理化を說明すること、而して此合理化に對應する概念を構成することが」經濟學の「主要問題の一つである[6]」と。即ち知る、此認識關心とは先づ以て Gewordensein としての資本主義を說明し了解すること、ヤスパースが正當にも云つたやうに「何故西洋は資本主義をもつたか」を明かにすることに向けられて

5) WL. S 483.
6) ebenda.

ゐたと云ふことを。

次に對象について見るならば、經驗的實在としての資本主義社會は自然主義の先達者が意慾したイデーではなく、またそのイデーと關はり合ひを持つて生成した ideal-real な社會の實相でもなく、ひたすらに經驗的な日常的環境の事實である。認識の主觀から實踐性が剝脫されたやうに、この對象からも ideal な側面が全然捨象されてゐなければならない。だが實在からの ideal な側面の捨象と云ふことはいかにして可能であるだらうか。ウェーバーが「規範的に妥當なる眞理の習俗的に行はれてゐる意見へのメタモルフォーゼ」と名づけてゐるものが、彼に於いては、その根據であると思はれる。[7] では之は何であるか。吾々はしばらく彼のこの主張を聽くであらう。彼は主張する、規範的に妥當なる眞理も經驗科學の對象となる時にはそれの規範的性格を失ひ、唯々『存在するもの』として取扱はれるに過ぎずして『妥當するもの』としてではないのである、と。『妥當するもの』が『存在するもの』となり、習俗的に行はれてゐる意見に轉化することがここに云ふメタモルフォーゼである。而して前者は經驗科學のアプリオーリであつて、經驗科學の對象の地位に上るものは後者のみであるとされてゐるのである。例を擧げれば、九九の表の持つ眞理は richtig であり規範的に妥當する。しかしそれは經驗科學にとつてはアプリオーリであつて、經驗科學者は對象をば直ちにそれで以て裁くことはゆるされない。彼は、たとへ對象に於いて九九の表が誤つて適用されてゐようとも、その誤れる習俗的な適用をそのままに承認しそれに從つて了解を遂げなければならないのである。ところで精神的聯關に關しては、『規範的に妥當なもの』とそれの對象界に於いて適用される仕方との關係は、形式的な九九の表に於けるよりも更に複雜であることは云ふまでもな

7) WL. SS. 493 ff.

い。けれども經驗科學の對象としては、規範的なる眞理は何れもそれの規範性が問題であるのではなくして、經驗的に知りうるそれの客觀的に real な形のみが取扱はれるのである。吾々の問題に歸つて云ふならば、自然主義者のイデーによつて實現した社會はそれの習俗的な在り方としてのみ經驗科學の對象界に入つて來る、と主張されるのである。從つてイデーが社會に實現する過程そのものは、イデーのメタモルフォーゼそのものは、經驗科學の對象ではなくして、唯々メタモルフォーゼを遂げた結果のみがさうでありうることになる。――經濟理論の對象界とは、ウェーバーにあつては、かかる意味に於ける與へられた資本主義的經濟組織である。

經濟理論の先驗的前提は以上の實質を備へてゐた。さうしてかかる認識のための手段が抽象的なる純粹經濟理論に他ならない。此理想型の構成の論理的なる手續きは既にのべられた。而して此構成は內容的に可能であり、また對象について妥當しなければならぬ。何となれば此構想の根據となる認識の主觀の「經驗的知識」は正に合理的なる對象界が支配的である西洋社會に於ける文化人のそれであり、主觀の有する知識が現實に對して「顯著なる實際上の重要性」を有してゐるからであり、從つてその知識に基いて構成されるこの理想型は Evidenz を持つと同時に事實上 Geltung を有するからである。〔註一〕。かくしてウェーバーに從へば、このウトピーである經濟理論はまた、Rechtsdogmatik と論理的に違つた意味に於いてではあるが、一つの Dogmatik となる。〔註二〕

〔註一〕 けれどもこのことは理想型が實在の型 (Real-Typus) であると云ふことには絕對にならない。real な對象を認識するためにこそ、ウェーバーは理想型を手段として要求したのである。例へば現象學的に理想型を變容してそれを Real-Typus とする試みも、實は意識の中に於ける real であるにすぎずして、實在と切り離されてゐることを知らなくてはならぬ。

「註二」 「それ（純粹經濟理論）は特定の、實在に於いては殆ど曾つて純粹には滿たされはしないけれども樣々な近似性の度

8) 前掲拙稿「理想型の理論」p. 74 參照。

合に於いて實在にあてはまるところの、假定を設けて、而して人間の社會的行爲が若し嚴密に合理的に經過したとすれば、此假定の下でそれは如何なる姿を呈するかと云ふことを問ふ。それは特に純粹に經濟的なる利害の支配を假定し、而して從つて權力政策的ならびにその他の經濟外的なる行爲の志向の影響を排除する。[9]」

この手段を以てする認識が經驗的妥當性から一切きり離されてゐることを要求されるのは既に明かである。ところでかかる方法論的意味づけは、吾々が第三節に簡單に展開したところのウェーバーの問題の把へ方に對して、如何なる解答を與へるものであつたか。云ひかへれば、之によつて歷史學派に內在した矛盾、歷史學派に對する抽象學派の批判によつて白日の下にもち來たらされた矛盾は如何に解決されたであらうか。――抽象學派の抽象性は「方法的補助手段」を「現實の模寫」と解し、更にそれを「理想」と見誤つた點にあり、[10]メンガーは認識に對して經驗的妥當性を要求した點に誤謬を犯してゐる。而して歷史學派についてウェーバーは、此反動が種々なる哲學的考察を以て合理的研究法 (rationale-Pragmatik) に代へようとし、心理的に存在するものと倫理的に妥當するものとを同一視したために、又しても存在と價値との混淆が行はれ、而して「歷史的・社會學的・社會政策的領域での此科學的發展を擔ふ人々の異常なる業績は普く承認されてゐるけれども、他方ではここ數十年間を自由に判斷する者に對しては、理論的ならびに嚴密に經濟學的なる勞作一般の久しい完全なる衰頽が上の問題混淆の自然の結果として現れた[11]」と書いてゐる。此學界の衰運を救ひ、自然主義と歷史主義との抽象を越えて經濟學に豐かなる成果を齎しうるものが方法的補助手段としての理想型による認識であるとされたのである。

二　理想型的認識の批判

9) WL. S. 498.
10) WL. ebenda u. S. 499.
11) WL. S. 499.
* 前掲拙稿「マックス・ウエーバーと十九世紀の方法的意識」の第三節。

ウェーバーが提出した問題はかくして解決せられ、此理論は唯一つの正しい方法論として經濟學界に君臨するやうに見える。果してさうであるか。吾々の此理論の實相探究は更に續けられねばならぬ。吾々は進んで問はう、此理論は積極的には何を物語つてゐるか、と。先づ抽象的經濟理論に對して不可避的なる方法的意義を承認することによつて、此立場を方法的抽象學派と名づけることができる。「近代の交換經濟的社會の『理念』」は對象認識のための尺度でありメスであつて、經驗的妥當性を有しない。と云ふことは對象の本質をば遂に明かになしえないと云ふことである。認識と對象との合致によつて獲得される眞理價値が遂に保證されてゐないと云ふことである。經驗科學の認識の眞理價値をそも〳〵の問題とする方法論の結論が理論に對して眞理價値の保證を與へ得ない、理論を現實の理論として承認し得ない、と云ふことは、まことに悲慘であると云ふ他はないであらう。方法論の自殺とも稱すべき此事態はしからば何處より生ずるのであらうか。吾々の批判の結論を前以て述べるならば、それは此方法論が單に認識批判の立場から省みられて科學認識と云ふ特異なる人間の一つの實踐的形成がそこで行はれるところの存在論的な基底によつて裏づけられてゐないと云ふこと、方法的意識が認識の自覺をそれの究極の地盤にまで透徹せしめてゐないと云ふ抽象性に基くのである。しかしながらこの批判の方向はウェーバーの理想型を捨てて顧みないでよいとするのではなくして、却つて理想型の現實との關はり合ひを更に深く見究めることを、ウェーバーが自覺することを止めたあるひは自覺しえなかつた點を更に追求することを、要求する。而して吾々がウェーバーの先驗的前提に立ち入つてそれによつて規定されてゐるものを見究めておいたのは、實に此要求に答へんがためであつたのである。さて抽象理論の現實との關はり合ひは、既に見たやうに、西洋の文化

人の生活環境としての Gewordensein としての資本主義の構造と文化人の經驗的知識とが相合致するところに恰も存した。此合致は主觀と對象とを包む現實の構造から見て必然的である。だからウェーバーは此必然性に基いて認識論を展開し得たのである。ここからして得られる重要なる結論は抽象理論が現實についてなしうる推論が近代交換經濟の自己解釋であると云ふことである。Gewordensein としての社會を nachträglich に了解するところに此理論の機能があつて。社會の型を Werden の過程に於いて見ることはできないのである。ところで吾々の認識は歴史的なる文化についてなされねばならぬ。理論認識も又過去の經濟社會について行はれねばならぬ。例へば古代都市について。その場合には對象の構造と主觀の經驗的知識と間には近代社會に於けるが如き合致あるひは一義性は存在しない。にも拘らず認識の主觀は自らの經驗的知識に基くことなしには認識を遂げることはできず、從つて對象に就いて見られる事象は自己の經驗的知識からは割り切れぬもの、直接に因果識認を遂げえないものとして非合理的なるもの一般の名が冠せられるであらう。だから認識は概念裝置を新にしてその非合理性を基調とする別の理想型に就いて行はれねばならない。その際注目すべきことは、第一には、この場合でもその理想型は Gewordensein としてのそれであることである。すなはち歴史的なる型の本質はいつも Gewordensein としての他は認識されえない。凡そ歴史的なる對象はその Werden の過程を認識しえてのみ、本質的に把へられるのでなければならない。かかる認識はしかし此方法論からは閉されてゐるのである。第二には、この新しい理想型は先の場合と違つて客觀的可能性が稀薄であると云ふことである。蓋し過去の經驗に關する表象は現在の經驗と異つて、「自然現象」の表象と異ならないと云はれ[12]、それだけに因果認識は的確ではありえないからである。

12) WL. S. 280.

ところで吾々の今の問題は理論である。理論は歴史性を持つものであつても、後の理論は以前の理論の眞理を包越し常に眞理の全體でなければならぬ。「眞理は全體である。」（ヘーゲル）理論のもつべきかかる全體性の要求はウェーバーの理論では滿たされることができない。抽象經濟理論の前にそれと異なる種々の非合理的なる理論の理想型が先んずるのみであつて、最後のものがそれ以前の理論の全體として自らの抽象面に非合理的なる理論の各々を宿してゐることを要求することができない。抽象的理論は成程近代社會とは實際上の關はりを持つて完結してゐてもあらゆる歴史時代を一貫してゐる經濟社會の中のロゴスを露はにしてゐるとは云ひえないのである。ゆゑに吾々は先には此理論によつて歴史學派の相對主義は一應克服されたと語つたが[13]、今や吾々は此理論の立場をば方法的相對主義と名づけざるを得ないのである。

更に歴史的認識と政策的認識とについて述べよう。吾々は先に發展の理想型の實例として古代の社會經濟のそれを擧げておいた。そこでは古代經濟史が政治との交渉を離しては考へられないと云ふ事情から「軍事の全權を完全に委任する人々」(rein militärische Konstituenzen) を標準として經濟發展の理想型が構成されてゐた。ここに明かに見られるやうに、發展過程そのものを理想型的に見ようとするならば、經濟的價値理念以外の價値理念によつてなされる外はないのである。それは此實例についてのみ個有な事態では決してない。中世都市經濟から近世資本主義經濟への過渡に於いても此要素を缺くことはできない。それはあらゆる社會經濟の發展過程そのものに附隨する本質的なる契機である。若し經濟史的認識が經濟社會の發生的認識であるとするならば、卽ち單に Gewordensein として理想型の繼起を並列せしめるだけではなく、その間に Werden の過程を挿入して一つの歴史的

13) 前掲拙稿「理想型の理論」p. 79 參照。

聯關を構成することであるとするならば、――發生的認識はかくしてのみありうるのであつて、ウェーバーが主張するやうな理想型的にではない――その聯關は經濟的價値理念を一貫して認識されるのでなければならない。と云ふことは、政治と經濟との價値理念の交渉の樣相を理論的に見究めることから問題を起さなければならないのである。かくしてのみ經濟の發展は相對的に獨立に認識されうることになるであらう。だがウェーバーに於いてはかかる理論が省みられる餘地はない。唯々先驗的に與へられる價値理念を他と全く引き離してそれの下で認識が行はれるに過ぎない。ゆゑに Werden の過程そのものに對しては非經濟的價値理念の跳梁にゆだねる他はなくなつて來る。以上の如く歷史的認識も亦社會の Gewordensein の形の繼列を全體を貫く聯關なくして把へうるに過ぎないのである。最後に政策的認識について。このものが技術的でしかないことは認識に對する要請よりして當然である。經濟政策の價値規準が經濟價値ではなく國家の權力價値でなくてはならぬと云ふ一八九五年のウェーバーの主張は[14]、ここに經濟政策學に向つて方法論的根柢を指示しえたわけである。けれども政策的立言は單に技術的妥當性を有するにすぎないものではなくして、相對的に獨立に實踐的妥當性を要求しえなければならぬ。相對的に獨立にと云ふのは、その立言が他の文化領域の政策的立言と呼應してそれらとの自覺的統一に於いて政治的實踐に移されうると云ふ意味である。而してこのことが可能であるためには、恰も歷史的認識によつて過去の經濟が相對的に獨立なる一つの聯關に於いて把へられるやうに、未來の經濟の樣相が一つの構造聯關に於いて先取されるのでなくてはならない。この未來の聯關の獲得は、しかし、ウェーバーの政策的立言からは全く斷ち切られてしまつてゐる。けだし、價値規準がその立言に內在するのではなくして、それを超越する權力價値

14) 拙稿「マツクス・ウエーバーの初期の研究」(本誌昨年四月號)參照。

に盲目的に服從しなければならず、經濟價値と政治價値との間の關係が與へられてゐないからである。

かく考へを進めれば、此立場は抽象學派と歷史學派との部分的承認あるひは折衷にすぎなかつたこと、而して折衷は止揚ではないからして從つて此兩者に加へた批判の鞭はやがて自らに對しても下されなければならないことが了解される。而して此立場は根柢から動搖して唯一の眞なる方法的意識として經濟學に君臨する權利を放棄しなければならなくなつて來る。それはそもそも何故であつたか。此理論の根柢となつてゐた十九世紀の歷史的意識そのものの中に、この吾々の最後の問に對する解答は見いだされるであらう。

三　十九世紀の歷史的意識

吾々は十九世紀の歷史的意識の本質をば、それを形づくつた三つの契機を述べることによつて、簡單に示すことができるであらう。

その第一は此意識の內に藏されてゐる實踐的要求である。ディルタイが十九世紀のドイツの歷史學の諸々の闘士について跡づけてゐるやうに、それらの人々の歷史的意識の內には國民的契機——ドイツ國民の統一と云ふ實踐的要望が結びついてゐた。[15] 此要望に答へるべく人々は十八世紀の世界主義的合理主義に抗して非合理的なる歷史的世界に沈潛したのであつた。而かも恰もここに此意識のもちうる視野が決定されてゐる。國民的實踐的要望とはドイツに於いて近代國家の完成を意圖するものに他ならなかつた。とすれば此意識に於ける社會とは近代社會、市民社會のことである。此社會はところで西歐に於いては既に Geworderlsein である。この世界史的に與へ

15) Dilthey 全集第十一卷に於いて、吾々は多くのすぐれたドイツの歷史家について、この事實を學ぶことができる。

られた社會をばドイツに於いてドイツの國情に應じて如何に形成すべきか、云ひかへれば、自然主義がヨーロッパの社會に於いてつくらるべきイデーとして見た社會の形を既に定められたものとして受取つて、それをば英佛に對してドイツ風に現實化するところに、人々の實踐的關心があつた。人類社會の形が與へられてゐて唯こそれの國民的形成の問題だけが實踐的に問はれるところ、ここに吾々はイデーの第二次性を見なければならぬ。又與へられた第一次的イデーとは近世のヨーロッパに於いて世界に先がけて見られ實現されたのであるから、この實踐的要求をば正當には國民的＝ヨーロッパ的、だと名づけることができる。此意識の根柢には「ヨーロッパ主義」がひそむのである。歴史學派は、而してウェーバーも亦、此關心を共有した。從つて彼等に於いては、經濟學の對象は Gewordensein としての近代交換經濟以上に出ることはできなかつたし、ウェーバーに於いては資本主義の永續が疑はれなかつたゆゑに、經濟學は方法論に自省されたとしても、方法的抽象學派たりうるにとどまつたのである。第二に擧ぐべき契機は第一のものに關聯して、歴史哲學の排斥と云ふことであつた。歴史學派の人々にもウェーバーにも而してディルタイにも此主張は一貫してゐる。これらの人々は何れもヘーゲル的汎論理主義の中にかくされたる形而上學的要素を批判し、歴史的世界の存在論のいかなるものからも形而上學的契機を嗅ぎつけた。而して歴史の哲學として之に代るものは歴史學の認識論を自然科學のそれとの對立に於いて組織すると云ふことであつた。經濟學に於ても方法論が認識論的立場から研究されたこと、吾々が既に見たが如くである。而してその結果は――認識の相對主義に、或は方法的に自省された場合に於いても方法的相對主義に陷つたのである。ディルタイに於いて歴史的意識が生の謎を解かんとして相互に鬪爭する諸この世界觀に對して向けら

れた時、「哲學の哲學」に對して得られた結論は世界觀の類型化に過ぎずして、結局は相對主義の非難を免れえなかつたと云ふことも亦、かかる立場のもつ制限に由るものと云ふべきであらう。この制限は第三の契機に於いて一層明瞭である。それは此認識論的意識が文化の分化を導いたと云ふことである。諸々の文化をそれぞれ個有の形態に於いて、それぞれが實現せんとする文化價値理念に關係させて、認識することが人々の關心事であつた。だから吾々が見て來たやうに經濟學に於いても亦、純粹なる理論は經濟價値以外の文化價値に關はる一切の文化現象をば對象界から先づ徹底的に除去することによつて成立した。從つて經濟生活が他の生活部面との複雜なる聯關に於いて問題となる場合に――經濟生活は具體的には恒にかかるものとして吾々の前にある――その具體的なる問題に答ふべき理論は科學としては逆に純粹性の喪失であり抽象的であると主張された。科學の此貧困を救護すべく現れるものは、ウェーバーの場合には、科學としては、形式的なる「社會的行動」を扱ふ社會學であり、實踐としては、科學に高められえない神祕的なる政治的豫言（註一）の外には何物もなかつた。すなはち經濟學に於ける立言の妥當範圍が、他の領域に於ける立言との聯關に於いて、自覺的に認識されまた實踐を指導することができないのである。ディルタイに於いても略同樣の事態を指摘することができよう。社會學をば歷史哲學とともに學として承認しえなかつたディルタイが現實の實相を解きうべしとしたのは「個別諸科學の擴がりゆく展開と完成化」によつてであり、またそのために「各精神科學に對する認識論的基礎づけの必要」を彼は痛感した。[16] 卽ち彼に於いても文化が分化する根據が先づ以て問はれてゐるのであつて、分化した諸文化の聯關の姿は認識に對しては遠く未來に橫はつてゐる。（註二）

16) Vgl. Dilthey; Ges. Sch. Bd. I, Erstes Einleitendes Buch, Kapiteln XVIII u. XIX.

〔註一〕 わたくしは常時の社會學に對するデイルタイの批評はあたつてゐると思ひ、此學問は社會科學の未熟な時代の早世兒であつたと考へる。またウエーバーの政治論をここで展開する餘裕をもたないが、彼に於いては結局政治は非科學的神祕的なるものたらざるを得なかつたと思ふ。ウエーバーが「ハイデルベルヒのミュトス」と稱せられたのもあながち故なきことではないであらう。またミュトスが哲學的に研究されてゐる現代に於いて、彼の政治論はまた現代的な問題を提供してゐるであらう。

〔註二〕 デイルタイに於いては、歷史的社會的現實は「人類の自然的構成ならびに各民族」の地盤の上で「文化體系」と「外的體制」とに分けられてゐる。しかしこの二つの分化する事態（Tatbestände）の地盤との構造聯關が、從つてまたこの二つの事態を取扱ふ二部門の精神科學の關係が充分明瞭ではない。「人間學」に對して彼が云ふところの「第二次の事實」「第二次の理論」「第二次の概念」（Vgl. Ges. Sch. Bd. I, SS. 41, 45-46, 114）は此關係を明かにすべきものであると示されてゐるけれども、このものは內容的には展開されてゐず、またデイルタイの心理主義の立場からは展開しえない制限が横はつてゐると考へられる。ゆゑに精神諸科學間の聯關が彼に於いては明かではない。從つて各精神科學の命題の眞理性は對象の現實との關係が確定されることによつて與へられると主張されても（Vgl. Ibid. SS. 28, 113）、その關係そのものの展開がないのであるから、その眞理性は具體的に示されてゐないと云はざるを得ない。

かかる方法的意識に對する疑惑を生じ批判の必要を喚起したものは第一次世界大戰であつたであらう。恰も十八世紀の歷史的意識に對する批判の叫びが、先に觸れられたやうに、[17] 革命と一人の英雄のヨーロッパ席捲とを契機として澎湃として起つたやうに、十九世紀のそれに對する批判も亦、ヨーロッパの戰亂とアジアに跨がるその大陸東北端の國家に於ける革命の成就とによつてひき起された。「歷史の危機」が叫ばれた。而してその危機の打開の試みは最初には例へばトレルチュによつてのやうに、ヨーロッパ人の自己批判の形で提供され、その後今日に至るまで、十九世紀の歷史的意識に代る新しい歷史的意識の確立は、最も根本的なる問題の一つとして、達成されずに思想界に置かれてゐると云つてよい。否ヨーロッパに於いてそれが達成されないままで、今や再び戰亂狀態が世界全體に襲ひかかつてゐるのである。確立さるべき歷史的意識をば二十世紀の歷史的意識と名づけること

17) 前掲拙稿「マックス・ウエーバーと十九世紀の方法的意識」第三節 B

がゆるされるとするならば、此意識に向つては、一體いかなるものが要求されてゐるのであらうか。而して經濟學に向つてはそこから如何なる見透しが與へられるのであらうか。

四　二十世紀の歴史的意識

吾々は二十世紀の歴史的意識についての要求を前世紀のそれの三契機と對比して述べよう。

第一に前世紀の歴史的意識の内に國民的實踐的要求が、更に一層正確には國民的＝ヨーロッパ的なる實踐的要求が藏されてゐたに對して、二十世紀の歴史的意識の内には國民的＝人類的なる實踐的要求がひそまねばならぬ。十八世紀の自然主義が理念として先取し十九世紀の方法的意識が與へられたものとして受取つたところの市民社會、すなはち近世のヨーロッパ的社會の形は今日生き盡されてその根柢から震撼しつつある。ゆゑに今日の方法的意識は、ウェーバーに於けるやうに、與へられたGewordensein として社會の形を受取るのではなくして、新しい人類社會の形を再び先取しなければならないのである。このイデーの先取はしかしヨーロッパ人の胸裡に既に遂げられてゐるか。恐らくはさうではないであらう。けだし彼等の從來の國民的＝ヨーロッパ的立場が方法的意識の地平を限界づけてゐるからである。〔註〕このイデー先取の遂行のためには實は國民的＝ヨーロッパ的立場から國民的＝人類的立場への深まりによつてのみ得られるところの方法的意識の地平の擴大が必要なのである。この新しい立場による地平の擴大に參じてイデーを先取しそれの實現に貢獻するところに、從來の世界の構成員の外にあつた東洋人の人類に對する責務があると云ふことができよう。けれども注意すべきことは、このイデーが

國民的＝ヨーロッパ的立場の反定立にすぎぬ單なる國民的＝東洋的立場からではなく、兩者の統一としての國民的＝人類的立場からのみ獲得されると云ふことである。ところでかかるイデーは「型」である。經濟學も從つて「型の學問」である。だがこの型は自然主義に於けるやうに實在と理想との直接的統一として「自然」ではなく、歷史主義の自己省察によつて獲得された「理想型」に於ける存在と當爲との峻別に媒介された統一としての real-ideal 或は ideal-real な型であるであらう。けれどもかかる型としてのイデーが經濟學的思惟にゆるされるのは、方法的意識が更に次の要求に應へうる時に初めて可能である。

〔註〕この稿を終へるに當つて私は H. Freyer の Das geschichtliche Selbstbewusstsein des 20. Jahrhunderts (1938) を一讀する機會を持つた。この小册子の中には、吾々が意圖してゐるやうに、十九世紀の歷史的意識の克服への道が一つ實存哲學の立場から示されてゐる。前世紀の意識に對する批判には大體同感しうるのであるが、唯〻吾々が摘出した第一の契機すなはちそれに於ける國民的（ドイツ的）＝ヨーロッパ的契機が認識されてゐない。而して二十世紀の歷史的自覺と稱せられるもののテーゼは「心の論理」(Logik des Herzens) であり、そこでは思惟に代るに意志が、證明に代るに信念が、多數者に代るに少數者——指導的人格が、擧げられ、また此自覺の根本要求は國民的生存の維持と階級鬪爭の克服とであると云はれてゐる(ibid. SS. 21-23) 而してここに此主張の制限が見られねばならぬ。この立場は畢竟國民的＝ヨーロッパ的立場の再生產にすぎない。だから皮肉なことに、フライアーによつて批判される歷史主義の殿堂を擁守しようとするロータッカーの最近の論文に於ける結論はフライアーに於けるとあたかも等しくなつてゐる！(Vgl. E. Rothacker: Historismus in Schmollers Jahrbuch (Schmollers Festgabe) Jg. 62, II Halbband) 歷史主義の批判は國民的＝ヨーロッパ的立場の超克によつてでなければならぬと云ふ所以である。

第二の要求は「歷史哲學の再興」である。十九世紀の歷史的意識が到達したものは歷史的現實に對して bodenlos な認識論であつて、歷史的認識がそこで遂げられるところの存在の構造は遂に認識せられなかつた。この歷史的現實の存在論的構造を明かにするところに現代の哲學の最も重要なる課題はある。ところで此存在論は古代

の實體の存在論ではなくして近世の認識論によつて媒介されたる實踐的自覺的存在論である。存在と認識とを眞に媒介するものは歴史的世界の創造的要素と云はれる人間の自覺的實踐の外にはないからである。ここからして新しい歴史哲學は認識論の深化を伴ふと云ふことがまた了解されなければならぬ。認識の客觀性は、ウェーバーに於いて見られたやうに、主觀に對する客觀性と云ふことではなくして、實踐に相卽する客觀性を意味するに外ならない。而して認識の相對主義は、ディルタイに於けるやうに、認識者の心理的構造を反省することによつてではなく、人間が行爲的に歴史的世界に直面して最後の闇の世界に突き當ることによつて却つて脱却されうるのであらう。ゆゑにまた此歴史哲學に於いては存在論と認識論とは別個のものではなく、實踐の論理によつて媒介される同一のものの二つの契機となるであらう。今この歴史哲學によつて認識される歴史的世界の存在論的構造に極めて簡單なる一瞥を與へるならば、之は先づ世界史的なるものでのみありうる。而して人類社會の世界史的進行、その途上に人類社會が取つた若干の形あるひは原型の序列、かかる過去の認識に媒介された現在の社會の世界史的段階の了得、而してイデーとしての未來の社會の原型の先取、かかるものがそこで遂げられる。また從つてそこでは社會もまた哲學的に把握されることになる。經濟學的思惟は歴史的社會の存在論的構造のかかる認識に媒介されてのみ方法的に自覺され基礎づけられる。此科學の認識は上記の歴史哲學的原型を受取つて、經驗的に認識しうる經濟社會の諸々の型を取扱ふのである。この型が real-ideal 又は ideal-real でのみありうることは之まで論じきたつたところよりして充分推察できるであらう。(註)この型の認識について重要なる事項に一言するならば、そこでは歴史・理論・政策の三立言部門は直接的に統一されるのではなく、又沒價値的＝理想型的に

へだてられるのでもなくして、その二つの部門が殘りの一つのものによつて相互に媒介されると云ふ構造聯關によつて緊密に結ばつてゐるのである。而してかかる構造を持つこの科學の認識の客觀性は、最後に、方法的意識に於いて要求される第三の契機によつて一層確められる。それは歷史的意識が文化の分化をではなく文化綜合を意圖すると云ふことである。前世紀の科學認識が分化した文化を一面的に把へたとは異つて、ここでは文化の構造の哲學的認識によつて媒介されることに基いて、また各文化價値の相互關係の眞相が看取されることによつて、各科學はそれぞれ他の文化科學との聯關に於いてそれぞれ認識の妥當領域を主張することができる。從つて政策的立言も亦、ウェーバーに於けるやうに政治と切り離されて政治の非合理性の支配を甘受するのではなく、實踐學的認識として正當なる發言權を要求するであらう。

〔註〕新しい型の理論をば素描なりにものべて、而して理想型理論がそれによつて包攝される所以を示すことが此研究の執筆のはじめにはもくろまれてゐた。しかし豫定した紙幅はそれをゆるさない。改めて私見を吐露する機會を持つであらう。

要之、二十世紀の歷史的意識は新しい歷史哲學的意識であり、經濟學は此方法的意識によつて指導されて自らの方法論を確立することによつてのみそれの現在の課題を解きうるであらう。此科學に向つては、いまやかくの如き根柢的なる再生が要望されてゐるのである。しからばかかる歷史哲學は現在現れてゐるか。欣ぶべきかな、吾々の手近なところにそれは生成しつつある。